



TITLE:

均田均役の實施をめぐって

AUTHOR(S):

濱島, 敦俊

CITATION:

濱島, 敦俊. 均田均役の實施をめぐって. 東洋史研究 1974, 33(3): 394-423

ISSUE DATE:

1974-12-31

URL:

<https://doi.org/10.14989/153559>

RIGHT:

均田均役の實施をめぐる

濱 島 敦 俊

一 はじめに

明末以降の江南に展開した大土地所有の形成の契機として商品經濟の發達という「直接的經濟的契機」とともに、「官僚層の上からの收奪」「優免の特權」などの「政治的契機」をも併せ考察すべきことは、夙に北村敬直氏によって説かれたところであつた。^①爾來、日本における具體的な研究の進展とともに、右の諸契機に基く官僚（身分を有する）地主の土地所有の發展が確認され、郷紳的土地所有、という概念が成立して來たと考えられる。^②かかる郷紳的土地所有は、直接生産者＝佃戸との基本的矛盾・對立關係に加えて、その身分的特權＝優免（徭役免除の特權）をめぐる、かかる特權を持たぬ中小地主層あるいは自作農層との對立を内包するものである。このことは、制度史的論理において云えるだけでなく、當時の江南デルタの各地の現實の政治史的過程に眼に見える形で現出しているのである。このような對立・矛盾の顯在化に伴って、いまだ力役として殘存していた里甲正役について實施された改革が均田均役法である。

すでに江南では、嘉靖から隆慶にかけて、十段法ならびに一條鞭法が施行され、雜役（里甲正役中の税糧徵收などを除いたものを含む）^③の銀納化、丁（實は田土）田への科派と秋糧帶徴が實現していた。とくに前者では、小山正明氏によると優免の限制がすでに行われており、それは均田均役への過渡を示すものであつた。ただ、税糧の催徴・收兌・運解や水利の

濬築^⑤等に従う糧長・里長などの里甲正役の基本的部分は、萬曆年間に入っても、依然として力役の形態で残存していたのである。浙江と南直、さらには各府ごとに差違を示してはいるが、これら糧長・里長は、具體的職分ごとに細分され、また大體は條鞭の施行と並行して、糧長は里長から僉充されるようになり、浙江ではその管轄區域が里に縮小されていた。これら職務の分化、管轄區域の縮小は、徭役の負擔の輕減のための措置であった。^⑥しかし徭役負擔の苦しみ役困の問題はこれでは全く消滅していない。それは、明末の松江府の役困について、「獨り徭役負擔（當役）が難きことである。だけでなく、誰に役を負擔させるか（審役）という問題が更に難事である」と述べられているように、徭役それ自體の重さにも増して、その負擔者の階層が下ってゆくことに問題があったからである。

もちろん徭役そのものの過重、あるいは胥吏・衙役さらには冊書（明末には包役化していた）などによる非合法的收奪が消滅したわけではない。しかしながら、特に明末に具體的な役困は、直接には、里甲間の（田土額の）不均衡に起因するものであった。里甲が徭役科派の單位である限り、その不均衡は從來よりも階層の低い人戸が役に當ることを意味し、その結果、徭役の負擔は相對的にも重くなるのである。かかる不均衡は、萬曆三十九年に南直隸三府で均田均役を施行した巡撫徐氏式の云うが如く、「そもそも一縣の田を合計すると一定の數がある。一方で増えると、他方では減るのである。官戸の田が日一日と増えるごとに、民戸の田は減らねばやまない」^⑦狀況、つまり優免の特權による免役田土の増大、つまり承役田土の減少に基いていた。その結果、「縣で一たび徭役の科派に遇うと、上戸が足りず中戸に及び、中戸も足りず朋戸に及ぶ」^⑧狀況が一般化する。

徭役の免除には元來二つあったと考えられる。一は郷紳を頂點とする官僚機構に位置する人々の優免であり、他は、所有地が零細な、いわゆる「畸零戸」の免役であった。郷紳の優免はすでに明初から存在していたが、嘉靖二十四年、その限制が行われた。そこでは雜泛の役ならびに税糧についての免除が、官職の種類・品級に應じて細く規定されており、他に、優免は實在の額について行なうこと、本人のみを優免し一族には及ばぬことなどが規定された。^⑨さらに隆慶年間に

は、優免が本人の居住せざる圖・郷に所在する田土には及ばぬことが規定されている。^⑨しかし江南デルタでは、かかる規定は完全に空文となっており、里甲正役をも含めて徭役が無制限に免除されていた。さらにかかる無制限は、郷紳本人のみならず一族から知人、さらには代償を得た上で、全くの他人までも自己の名下に容れて徭役を免れさせる詭寄を生み、本地以外の地に田土の詭寄を容れる寄庄（客官の濫免を生み出した）。一方で、畸零戸の免役を利用して、郷紳以外の大戸が冊書・胥吏と通謀しつつ田地の名義を鬼戸に細分する花分も行われたが、應役田土の減少の基本的な原因は郷紳の優免による詭寄にあったと考えられる。

かくて、元來は大戸の僉充によつていた糧解の諸役には、多く、中人家と稱される、身分的特權を持たぬ中小地主層が充當され、里役には小戸が、さらには佃戸層まで派役の對象となるに至る。明末にはこのような「畸零戸」への科派が、朋充（數人で一役を負擔する）或いは貼役（力役の負擔者に銀錢を出す）という形態で以て常態となりつつあったのである。このような徭役負擔者の階層低下の結果、「下（民）は則ち身家俱に斃れ、上（官）は心も口も兩つながら窮す」るのに対して實施されたのが、明末から清初にかけての均田均役法であり、それが、郷紳の優免の限制を根幹としていたのは論理的に見ても必然であつた。それは、形態は異なりつつも、等しく、徭役の科派の基準の田土への全面的移行と、最終的には廢止に到る優免の限制の二點を基本的内容として、江南の各地で實施される。^⑩この改革は康熙年間に到つて始めて中央政府の統一的指示のもとに實施されるが、それ以前は各地で個々に、多くは縣を單位としながら實施さ（或いは挫折させら）れている。筆者はこれら明末清初の江南の諸改革のなかで、とくに明末の浙江の嘉興府及び湖州府で行われたものについて、すでに若干の考察を試みた。^⑪そこでは、改革を必然ならしめ、實現させた社會的政治的背景について聊か觸れるところはあるが、力點を均田均役そのものの制度史的追跡に置いていた。ここでは前稿を踏まえ、若干の補足と訂正を加えつつ、改革の契機・背景を探ることにする。當然のことに、改革の背景を論ずるには、實施された各地における政治的社會的條件のみならず、萬曆以降の三朝に涉つて展開された支配層内部の黨争、多くの民變や農民反亂、さらには陽明學或

いは東林などの思想史的展開との關係などが視野に含められねばならない。しかしながら、史料制約と筆者の非力とによつて、これら多岐に渉る課題の掘り下げを充分に爲し得なかった。とりあえず本稿は、全體的な政治史的過程の把握への手懸りとして、明末江南デルタで實施されたいくつかの均田均役の改革について、その實現の過程を追つて見ることにしたい。

二 嘉興府の改革——海鹽縣を中心に——

(一)

管見の限りで、明末の嘉興府で實施された均田均役の事例は、表の如くである。表中に記された知縣名は、何らかの史料によつて、均田均役の實施が確認されるものであり、推定に止まるものは（ ）を附した。表中のアルファベットは、それぞれ次の如く、均田均役の内容を示すものであり、これについても、（ ）を附したものは推定に止まるものである。

- a 優免の限制。 a₁…縣の總額の規定。 a₂…總額を規定せず。 a₃…寄庄の優免の否定。
- b 畝數による里甲の編成。 b₁…民圖・官圖を區別せず。 b₂…同じく區別あり。
- c 正役の解體。 c₁…官解。 c₂…自封投櫃。
- d 市戸（城鎮に居住せる無田の戸）への科派。

この圖の示すように、桐鄉縣^⑧以外の嘉興府下の全ての縣で均田均役の實施が確認される。ここで行われた改革の第一點は、従来の戸數編成に代えて、畝數によつて里甲を編むことであつた。嚴密に云えば、一定の畝數（を持つ戸）について里長を充當するのである。概してその畝數は三百畝前後である。これが里甲間の不均衡に對する解決策、つまり「均田」であつた。しかし、この均田だけでは役困は解決しない。承役田土の絶對數の減少がある限り、嘉興縣に典型的に見られた

〔明代嘉興府の均田均役〕

湖 平	善 嘉	水 秀	興 嘉	名 縣 代 年
	⑦			萬曆九年 (辛巳) 一五八一年
				萬曆元年 (辛卯) 一五九一年
(b) ⑨	b ₂ (a ₂) 謝應祥		(c) (a) (a ₃) ① (鄭振先)	萬曆元年 (辛丑) 一六〇一年
b 朱欽相	b ₂ a ₂ 徐儀世		(a) ②	萬曆元年 (辛亥) 一六二一年
b ₂ a a ₃ 陳熙昌	b ₂ a ₂ 吳道昌	a ₂ ⑤	← c ₁ b ₂ a ₂ a ₃ ③ 蔣允儀	天啓元年 (辛酉) 一六二一年
	b ₂ a ₂ (a ₃) ⑧ 蔡鵬霄	a ₁ ⑥	← c ₁ b ₂ a ₁ a ₃ ④ 張鳳翥	崇禎四年 (辛未) 一六三一年
	b ₂ a ₂ (a ₃) 劉大啓	李向中	c ₁ b ₂ a ₁ a ₃ 杜渭陽	崇禎四年 (辛巳) 一六四一年

桐 郷	崇 德	海 鹽
		蔡逢時 $b_1 \quad a_1$
	b ⑩	王臨享 $b_1 \quad a_1$
	b	李當泰 $b_1 \quad a_1$ a_3
蘄一派 ⑪	$c_1 \quad b_2 \quad a$ $d \quad a_3$	喬拱壁 $b_1 \quad a_1$ a_3
		樊維城 $c_2 \quad b_1 \quad a_1$ a_3
		⑫
		劉堯珍 $c_2 \quad b_1 \quad a_1$ a_3

〔表注〕特に注記のないものは、すでに前稿で典據を示してある。

① 崇禎『嘉興縣志』卷一〇賦役、「萬曆二十九年知縣鄭振先、錢糧徵收、解給兌運等項申文」に、三二項にのぼる徭役改革の上申が項目名のみ示されているが、第一六項に「議查優免」、

第二一項に「議寄庄官戸」が見える。② 同、蔣允儀「嘉興府嘉興縣、爲釐正賦役、以甦民困事。均田十議」の第二條「一議限

田、兼論自運」に、「凡郷紳優免之數、自甲科・郷・貢・賁・以及衿士、自三千畝以及三十畝、層累而上下之。各有等、則毋得浮于外也。前冊詳議、視海鹽例。」とある。但し實效については論及がない。③ ②の「均田十議」および、また卷二二、藝文所收、陳

懿典「嘉興縣蔣侯新定均田役法碑記」を参照。④ 『嘉興縣啓禎兩朝實錄』（前稿一七七頁）は、崇禎四年と述べているが、崇禎

「嘉興縣志」は、「崇禎七年知縣張鳳翽、採用郷紳虞廷陞均田二十三議」と述べ、虞廷陞の議を紹介している。その第七條は「見今の免田十四萬四千畝及び原額約六千畝を以て永免之額と作爲す。云云」と述べ、總額が固定された。なお卷二三藝文にも虞廷陞の議が收められている。⑤ ②「均田十議」第二條。（②を承けて）「今海鹽以科第日盛、寧瘠官以肥民、郷紳自願遞減矣。若平

湖、免數亦相若多者、則分爲民里、少者不得取盈。一切之法、誰敢自異。而本縣獨掣肘難行者、蓋以里多田少、不及海・平遠甚。而科第過之。況與與秀水同處一城、難分二畛。彼此互籍、優免更多、再一通融、濫賜無底。今仿歸（一）歸安——筆者注・烏（一）烏程）之例、爲兩縣會免之法。而稍寬其額、如舊議應免一千者、量加二百、等而上之、皆相視也。計其官應免田若干、秀免若干、共足限數。限外之田、照所均之數、一體編里。」また崇禎「嘉興縣志」卷二藝文所收、陳懿典「嘉興縣蔣侯新定均田役法碑記」には、秀邑湯侯と輿論を博詢したとある。⑥④「均田二十三議」第五條に同じ趣旨の規定がある。⑦嘉善縣では辛丑の編審以前には全く行われなかったという記述がある（前稿一七二頁）。また同縣の鄉紳、支大綸「支華平先生集」卷二九「復邑侯」には、「海鹽自蔡令（萬曆九年の蔡逢時——筆者注）行此例、垂二十年、上下帖然。吾邑往歲亦嘗議均、而以免數太均、士夫不免有言。今第倣鹽官例而行、當必有欣然響應者。半月之勞、十年之利、帷臺下留意焉。」とある。⑧果して客宦——寄庄の優免の廢止が爲されたかどうか確定はできない。しかし、前稿に紹介した（一七三〇四頁）陳龍正の辛未・辛巳の兩次に涉る條議を比較すると、前者で提議されていた寄庄の優免の廢止が、後者では觸れられていないことは、辛未の編審で處理された可能性を示している。ただ嘉善・秀水・嘉興三縣の寄庄は、川勝守氏の研究で示されたように、土地・税糧の歸屬の問題もからむと考えられ

（「浙江嘉興府の嵌田問題」史學雜誌八二—四）、今後の検討に委ねることにする。なお蔡鵬霄の改革については、丁賓「丁清惠公集」卷八「復蔡培自父母」、曹熙「曹宗伯全集」卷九「蔡侯均役記」にも述べられている。⑨辛丑乃至はそれ以前に實施されたという記事はない。しかし前稿（一七五〇六頁）で紹介したように、辛亥の編審で、一割増えて三百二十五畝になったという記述があり、そこから推定すると約三百畝で一里長という規定が辛丑の年に存在したことが推定される。⑩康熙「石門縣志」卷二賦役所收、萬曆二十九年知縣靳一派「編審事宜」八條の第六條「分田」に「均田編里確論也。崇行之、業二十稷矣。」とある。⑪⑩の「編審事宜」第一條「優免」に「照田編役、郵齊民也。論級免田、優士紳也。而閭邑父老士民僉云、優免本縣鄉士

夫可。旁及外郡邑不可。……合無遵倣郡議免格、酌定多寡、儘扣本縣免外田地若干。然後通計樂縣每名里長、應該田地若干。將寄庄一槩編審、寸土無得幸免焉。」と定められている。こゝでの優免の制限は總額を固定するのかがどうか明確でない。なお第二條「坊里」では、市鎮の（無田の）殷實の戸の役負擔を定めている。⑫特に記述が無いが、繼續されたと考えてよいであろう。

如く、一里長あたりの畝數は減少する。つまり里長に充當される戸の階層的下降が起るからである。従って嘉善の鄉紳、丁賓が「聞くところによると、議論は均役に重點を置いて」と云う。此は固よりかくあるべきである。蓋し、均甲（一均田）を行なつて均役をしないと、均甲は反つて惡政となる。まだ均甲を行なう以前は、わが縣に富戸も多く、小民も甚

しくは困らなかつた。均甲より後、小民は良いめに會わぬ上に、富戸もともに蕩然となつてしまふ^⑤と語るように、均役の優免の制限が第二點に上つてくる。現實には大明會典所載の規定をはるかに越える額が優免を認定され(表注④)に示されるように、原額^⑥會典に従つた縣全體の優免總額は六千畝であるのに對し、現實には約二十五倍が優免される)、それを超える分は徭役を科派された。制限には二つの方法があり、海鹽縣などでは縣全體の優免の總額を算定し、(計算の基礎は、進士三千畝を頂點として、個々の品級に應じた免役田土數がある)その枠を固定したのに對し、嘉興縣などでは始め總枠が定められず、結果的に免役土の増加がもたらされ、前者への切り替えが計られている。以上の二點が改革の骨子であるが、同時に力役としての徭役の解體―官解、自封投櫃―の方向が同時に現れている。さらに、萬曆二十九年の海鹽縣の里甲の如く、地縁性の喪失の傾向が明らかとなつて来る^⑦。總じて、これらの諸點に、里甲制の消滅の傾向を看取することができであろう。

(二)

このような改革を最も早く實施したのが、表にも明らかのように、萬曆九年の海鹽縣の知縣蔡逢時であつた。その改革の過程について、天啓四年に刊行された縣志『海鹽縣圖經』に、かなり詳細に記すところがあり、このこと自體が改革を取りまく背景についての一定の状況を推測させると考えられるが、その點については後で觸れることにする。この天啓『海鹽縣圖經』(以下『圖經』と呼ぶ)の卷九、役法によると、萬曆九年の改革は、陳允武・李絢・沈愛涇という三人の「邑民」の請願を按院が批准し、これに基く「士民覆呈」が出され、その批准後、蔡逢時の「均甲事宜」となり實施されたらしい^⑧。蔡逢時の均田均役關係の記録は縣衙の火災で失われたと云い、『圖經』にはその代りに陳允武等の提議が收められている。それは「三百畝之家」で以て里長一名を編み(不足の時は「二百畝之家」を充て小戸が之を助ける)、郷宦から生員・吏承までの優免額を刪定するものであつた。

なお川勝守氏は、筆者の所説につき、萬曆九年には優免の制限が行われていない、という重要な批判を提示された^⑨。

批判の根據は、『圖經』卷九役法の本文の記事（前稿一六四頁所引）中の「一則以此時士夫優免尙無限制」の文、特に此時の解釋だけにあると考えられる。川勝氏は「此時」を萬曆九年を指すものとしておられるが、文脈からしてこれは嘉靖間を指すものとしたか考えられないのではなからうか。つまり田畝に就いて取齊し、里甲を再編すること。均田の提議は、すでに嘉靖年間にあったが（その時點では實現できず）、萬曆九年に到って始めて克く擧げられた（成功した）のには然るべき理由があるとして、二つの時點の對比をしている文體となっているのである。第一にこの本文の記事が右の如く解されるのみならず、第二に、改革の背骨を成した陳允武等の提議が明白に優免の制限を含むものであること、また、第三に『圖經』卷九人物の蔡逢時の條には、

公乘丈田後、行均甲法。先定士紳免額、次歸併貧里、陞富里。槩以三百二十、受一役。專以田爲主、而戶勿論。（傍點筆者）

とあることなどをも併せ考えると、すでに萬曆九年に優免の制限は行われたとしてよいであろう。

邑民と記された三人の階層はどのようなものであったろうか。『圖經』卷一三には

陳允武、邑賦長。初里甲田畝不均、貧民受病。允武力控於上、得行均甲法。事詳前簡役法中。同事者、李綱・沈愛涇。陳與李、並有後爲諸生。而沈竟絕。

とあり、いわゆる糧長クラスの在地手作地主層であつたと考えてよいであろう。さらに、後の絶えた沈愛涇を除けば、二人ともその子孫は生員となっており、下級讀書人と非身分的手作地主層との一定の階層的な重なりが推定されるのである。海鹽縣において生員・手作地主層が均田均役の提議を行なった事例は萬曆九年のこの三名の例の他にさらに二例見出すことができる。『圖經』卷一三には

湯承憲、字懲豫。……邑均田均役兩舉、並上議、佐其成、爲利遠。蓋個儼雄奇好義之士。惜以胃監老、用不克究也。子雲次・雲章並茂才。

とあり、均田均役（おそらく九年より後であろう）に係った青監^①國子監生がいる。また王文祿『百陵學山』書牘二、上侯太府書には、嘉靖四十年の編審に際して、生員賀整が「均甲」ならびに「粮里長爲一」を舉呈したと云い、同じく「答范二府書」には

近有生員賀整、舉呈均里。此法甚善。祿讀其呈、爲之揮淚。祿等每科水路費凡百、皆出之民、不能爲民一言之、以解民之苦。一貧儒肯言之、寧獨無愧。整昔有田四五十畝。一役里長而廢貧極矣。

とあり、ここにも生員たる小地主が、均田均役の提案を行なっているのが確認される。このように、海鹽に於ける均田均役は生員層をも含む特權を持たぬ中小地主層がまず推進するところであった。この賀整の事例の示すように、これら中小地主は郷紳による免役田土の増加の結果としての徭役の過重な負擔が集中していた階層であるが、その點は生員層にも共通の現象であった。里甲間の不均衡の是正と、優免の制限の要求はまず何よりも彼等自身の階層的利害に基礎を置くものであった。

身分的特權を持たぬ地主層に對して、郷紳地主がこれと逆の利害を有するのは當然である。すでに隆慶年間に、儒民並びて役する提議が民から出てきた秀水縣では、知縣由禮門が、爾民の子孫にも將來仕官するものがあるであろう。今日士を優遇するは、まさしく爾の子孫に恩を貽すものである。として均田均役を退けたというが、嘉靖末からの徭役改革には郷紳の妨害があり、知縣など地方官もそれに左右されていたらしい。王文祿の「上侯太府書」「答范二府書」には、賀整の呈議を知府侯東萊は研究し、「條分節解、評註詳明」して「大巡」^②巡撫に申請したが、久しく批允を見ずにいたところ、鄧給事の均甲を善とする奏章が下頒され、皆その恩に感じいった。四百畝で一里長を充當すると云うこの法を聞き、逃亡の民も漸く還りつつあったが、久しく示を見ない。恐らくは阻撓があるのであらう。と言い、さらに田土千頃を運ねる人物が四百畝一里長の均甲案を聞き、千頃では里長數十に當るとして、慨然として樂しまず、「廣く沮撓之計を設けた」事例を擧げている。海鹽縣の郷紳が、均甲を阻む側にあることは明白であり、かくて中央政府―省レベルでの批准を得た

改革も、在地の郷紳の抵抗の下に、知府も如何とも爲し難かったのである。さらに郷紳は地方官に壓力をかけて實施を阻止するのみならず、改革を切望し推進する中小地主層に暴力を加え、これを直接抑壓する。『圖經』卷九、役法の記すところでは、陳允武などは、「富家巨室の、中害（不利益）を悦ばざる所となり、簞朴さるゝこと屢なり」と云う壓迫を受けていた。均田均役の改革に對して郷紳地主が本質的敵對者として現われたことが確認できよう。

(三)

かかる對立のもとで、萬曆九年の改革は何故に可能であつたのか。『圖經』卷六には、王文祿なる舉人が、つねづね陳允武等三名を「護持」し、九年の編審に際會して、三名を知縣蔡逢時に引き會わせたことを傳える。蔡逢時は三名の具陳を聞くや卽座に改革の實施を決定し、案を目抜き通りに懸け（公開）させ、改革を始める。王文祿は自らの編んだ『百陵學山』^①（隆慶二年序刊）に、徭役を論じた自己の文章を數篇收録しているので、主にこれによって王文祿の考えを見てゆきたい。彼は三百畝を所有する中地主であり、陽明學左派の徒であつた。^②その均田均役の實施の主張は、「策樞」三均役、「書牘」一上臺府時務書、「々」二上侯太府書、答范二府書に展開されているが、それは論理的に大きく三つの部分に分けられる。第一に彼は、いわば法理論的に、祖制（黃冊の記載事項）や會典の規定などによれば、無限の優免が根據無く、郷紳といえども民とならんで徭役を負担すべきことを言う。^③第二に、一種の平等思想に裏付けられつつ、いわば倫理的に、士大夫の責任（國家と民、とくに後者に對しての）を説き、民を愛護すべきを言う。そこには士と民を截る、^④分の思想はきわめて稀薄であり、民より士は出で、士はその輿望を擔うべきものとされる。^⑤第一よりも第二に多くの文言が割かれており、また第一點も第二點に支えられているが、この二點だけでは郷紳を説得することは不可能であらう。第三に彼は、「役を均しくするは以て郷官の富を久しからしめ、怨を均しくするは以て郷官の壽を久しからしむ。實に郷官の爲に造福するなり」（上侯太府書）と述べるが如く、均田均役を行なうことが郷紳の利益であり、行なわざるは不利なるを言う。

さらにこの第三點は二つの部分から成っている。一は、一種の因果應報による個々の郷紳の直接的不利益であり、民の怨みを買った郷紳の死後、押しつけられた役の負擔によってその子孫が没落する例を擧げる。二は、郷紳支配總體の危機としての小民の蜂起である。「策樞」均役には

世道之不平者、民心之不平也。民心之不平者、貧富之不均也。貧富之不均者、徭役不均也。欲世道之平、在民心之平。欲民心之平、在貧富之均。欲貧富之均、在徭役之均。……（詭寄の盛行を云い）……此富愈富而貧愈貧、民心何由平乎。……是故、正經界以復原都、造冊之要也。晝里甲以均徭役、造冊之綱也。不然、貧富不均、則民心不平、世道何由平哉。上官不爲之平、下民將起而自平之、以洩其不平之憤難言也。（傍點筆者）

と言ひ、「上侯太府書」には

今者、逃亡之民一聞均甲、漸々復還。久不見示、又逃亡矣。秋水大溢、蘇松湖州皆荒、止本府有收、皆公賜也。奈今多逃亡。蘇湖不久恐變。若逃亡之民助之、勢轉熾矣。矧江右已變、先焚鄉官之宅、又撻鄉官之膚、可一徵也。祿之直言、正所以消變于將形、所以保鄉官也。夫鄉官者、由舉人、爲進士也。祿言之、豈不惡傷其類乎。

と言ふ。ここには徭役の不均が民心の動搖を招き、世道＝秩序の不安定に結果すること、流亡の發生（それ自體が徭役の不均がもたらしたものである）に媒介されつつ（民）變が起り郷紳が攻撃されることを警告する。王文祿は自ら舉人であり、自らのよって立つところが郷紳と一致することを強調しつつ、徭役不均の結果としての郷紳支配の危機を説き、改革によつて「變」を未然に防止することを主張するのである。

右の四點のうち、第一點はいまさら效果なく、第二點も主觀的であり、客觀的に郷紳を説得し得たのは、恐らく第三點、それもその二ではなかったか。これ以上、改革の具體的過程を明らかにする史料を見出せないでいるので推測にとどめるが、後述の湖州の事例や萬曆年間の鑛税をめぐる民變から類推するとき、徭役の不均の是正、均田均役の實施を求め、何らかの民變が生ずることは、王文祿の杞憂ではなく、現實に豫測することが可能であつたのではあるまいか。ただ

萬曆九年の時點では、郷紳が改革に合意していたというよりは、むしろ逆の立場にあったように感じられる（二九年以降は、郷紳の反對が記述されていない）。改革を求める中小地主層を、九年以前に、郷紳が暴力的に抑壓していたことはすでに見たとおりであるが、萬曆九年においても、そのような雰囲気があったらしい。『圖經』卷六役法には、蔡逢時が改革に着手してから後について、次のような事態を傳える。

王性慙而氣俠、至舞劍於侯側、佐之曰、我一老孝廉、無子絕後。何懼於邑豪。有撓我侯令者、我卽以老命博之。

王文祿の個人的資質もあれ、暴力を以てしても改革を阻撓しようとする郷紳の存在が推定されるであろう。

(四)

萬曆九年以降、段階的に改革は進展する（前稿一六六―七〇頁）。そこでは個々の郷紳の規定優免額を積上げる方式を採らず、縣の優免總額を約八萬二千畝と定め、一切の優免はこの枠の中で處理した。従って、有資格者の増大とともに、個々の優免額は縮小され、始め三千畝あった進士の免額が、崇禎十四年には千八百畝に減額されている。かつて嘉靖と萬曆初に改革に固く反對した郷紳達は、『圖經』卷六役法によると

廼樊公（維城―筆者注）、當科甲寢盛、免額難盈之日、復割士紳三之一、以失無小民役田、舊實力持之功爲大。而同儕彭孟公諸君、欣然以減免首倡、無負公爲民德意。上下相與有成。

とあって、三分の二への減額を郷紳が首倡して知縣樊維城に協力したと云う。萬曆九年には王文祿一人しか協力者が見出せず、郷紳が暴力的な反對をしていたのに對するこの變化は何によって生まれたのであろうか。そもそも同縣の均田均役の紹介に詳細を極め、その點で同時代・同地域の方志の中でも特異なこの天啓『海鹽縣圖經』は、自らも均田均役の改革を行なった樊維城が、郷紳胡震享に編纂させたものである。樊維城が均田均役を行なうに至った契機を直接に示す史料は無いが、彼が魏忠賢を彈劾し、東林を擁護する側にあったことを考えるならば、いわゆる東林とされる一群の人々に共通

な認識——苛酷で恣意的な收奪が小民の反抗を招き、支配の危機をもたらす——を共有しており、この認識こそ彼を契機づけていたのではあるまいか。魏大中『藏密齋集』卷二〇書牘、「答樊海鹽」(甲子〓天啓四年、三月廿一日)には

觀民至悉。老父母近來治行與其起居、甚慰。長興之變、訛言孔將近。綜其事、大都其根種子發葉閭生輩之逆謀、而吳野樵等進以鄞城(長興―筆者注)爲可憑退、以所鄰山藪、爲可遯而藏也。……石父母死而長興全。長興全而浙西三郡・江南四郡・陪京數郡全。石父母之功、豈獨在長興哉。餘黨四布、旋起旋敗、然旋敗亦旋起、吾鄉非無事之國。所賴一時、賢父母德惠材望、頤頤長興、而深思密算、與其福澤、又過之。老父母復樹赤幟海上、爲諸邑先恃以無事耳。

とある。まずこの間の樊維城の治績が東林と目される魏大中から見て好ましいものと把握されていたことが確認されるが、もう一點魏大中が樊維城に期待し、かつ樊維城も何らかの具體的な施策を行なっていたらしいのは、長興で天啓二年に摘發され、天啓四年には長興知縣石友恆を襲殺した宗教的色彩を帯びた民變への對策である。^⑤嘉靖から萬曆を経て天啓に到った時の郷紳の姿勢の變化の背景には、とくに萬曆後期からの民變等があったのではないか。

問題を残しつつ嘉興府海鹽縣の検討を終える。他にたとえば徐必達と賀燦然の論争など検討すべき事例がいくつかあるが今後の課題とし、湖州府の検討に移りたい。

三 湖州府の改革——朱國禎をめぐって——

(一)

湖州府においても、嘉興府と形態を同じくする均田均役が實施されたことは、前稿で推定したところである。すでに紹介したもの他に、若干の知見を加えたい。長興縣においては、崇禎年間に知縣李向中が均田均役を實施したが、それより早くすでに萬曆二十九年に知縣金玉節が實施したと云う。縣志の役法の項には全く觸れる記事が無いが、康熙『長興縣志』卷六金玉節の條には、

值礦使爲呂厲、公繩以法、陰剪其虎翼、卒不敢肆獻礦、尋罷稅。歲當編審。先是、十二區拘以田額豪右多詭匿・冒寄、單寒益苦于役。節始通融均攤、謂之走區走甲。薦紳優免如制、餘盡應公家徭。哀多益寡、民稱便焉。以丁艱去。政詳丁元薦去思碑記。

とあり、朱國禎『湧幢小品』（以下『小品』と略稱する）卷一四「緒帖」には、

今長興金知縣、業行此法。彼中士夫素稱強直、然已帖帖親認。郡中頌金長興者、萬口如一。豈可行於長興、而不可行於各縣哉。若各縣不行、無論失此機會、十年內民無子遺、而長興士夫且將援以爲例、一日又將變而歸之民矣。可不慮哉。可不懼哉。

と興味深い事情を傳える。この走區走甲とは、おそらく均里・均甲に當るものであり（さらに云えば地縁性無き里甲をも推定させる語句である）、優免の限制と合わせて均田均役が實施されたことは確實である。史料中の丁元薦は長興の萬曆十四年の進士であり、甘泉學派の許孚遠に學び（朱國禎と同學である）、顧憲成や高攀龍と交流した東林系の人物であり、後述の朱國禎の提議による改革に際しては國禎を擁護しており、天啓四年にはたまたま家居して、吳野樵・徐山永など葉闕生の餘黨の蜂起に際會し、殺された知縣石友恒に代わって吏民を指揮して鎮壓に當たった郷紳である。時を同じくして萬曆二十九年、烏程・歸安で均田均役が頓挫するのに對し、長興で實施できたのは、大家縉紳の徭役忌避を批判する丁元薦の存在が無關係ではなかったろう。また金玉節が均田均役以前に同縣について礦稅の賦課を拒んでいることも注目値する。ただ、同縣の方志に據る限り、崇禎の李向中以降の改革についてはある程度具體的に傳えられているのに對し、萬曆二十九年の金玉節（ならびに三十九年の游士任）^⑤につき役法や郷都などの項に具體的記述が全くないことは、まさしく朱國禎が危惧せるが如く、烏程・歸安における改革の挫折が、再び長興の強直を稱せらるる郷紳を動搖させ、改革が廢棄もしくは空文化した可能性を示唆するものである。

この他に、萬曆三十九年德清縣で、貴室大家が倖免を計るのを抑え、知縣熊德陽が、丁と田が均平となるように里甲

を編んだと言う。^④

(二)

萬曆二十九年、烏程の郷紳朱國禎は均田均役の實施を浙江巡撫劉元震、按察使馬從聘に具呈した。國禎の言うところでは、すでに二十年前の編審の時に、舊來の原則による里甲編成の矛盾が顯在化していたが、代々の知縣は豪貴に把持せられて「在圖還圖、在甲還甲」の說をとり、一畝・半畝の零細な土地しか所有せぬ者が數分の役に充てられる一方で、勢家の佃戸・叢僕、疎屬の遠親が膏腴の田土を萬倍も所有しながら、三十年來、一手一足、一錢一粒も役に應じていない。民は口を開けば杖せられ。争辯すれば枷せられるという、勢窮まり理極まるの時、^⑤を迎えていたへ掲帖。この状況を前に、國禎は(一)均田の實施、(二)優免の參酌、(三)限外への派役の三點を提案したへ掲帖。その後の事態は、國禎の記述では次のように展開した。

『提議が誤つて採用され、發令された時はすでに編審が完了し、民衆は怒つて闕然となつてゐる時であつた。折しも按察使が嘉興から吳興に來ることになつてゐたが、それに焦點を合せて、改革を求める民の示威・請願が展開される。國禎は(南潯鎮の居宅を出て)平望鎮から府城まで水路同行したが道旁には遍く、均田便民」と大書したステッカーが貼られ、水路に沿つて首尾を見ざるほどにぎしりと群衆が詰めかけてゐる。群衆は府城に近づくにつれて増すばかりであり、中には大聲をあげて叫びながら水に投ずる者も出て來る。府城に上陸したが一行は群衆に阻まれ進めない。數人を逮捕しても直ちに奪還されてしまふ。役所(府衙か)に辿りつき、状況について烏程・歸安兩知縣に詰問したが、知縣は發すべき言葉も無く、三日以内の鎮靜を兩知縣に嚴命して按察使は座を立つた。そこで、學宮で合議することになったが、群衆はそこにも押し寄せ、橋から落ちる者も出るほどひしめいてゐる。會議の場のヘゲモニーは完全に民衆(百姓)の手中にあり、知縣は爲すすべもない。自棄になつた知縣は、一切を均の字に據つて、齊しくしてしまふ。

一方、これに對して結集した大族の子弟は知府と直接交渉し、惡罵を浴びせる者もいた。激怒した知府の見幕に多くはこそそこそ逃げ出したが、生員二名だけは自らの名まで明かして恐れるところがなく、これを逮捕しても護送するすがない。彼等は初めから「僕從」およそ千人をひきつれて來ており、南潯鎮の國禎の居宅を焼打ちしようとしたが、三里も行かぬうちに、民が聚つており、まさに格闘となるであろう。との情報が入って引き返した（府城にかゝる）。今度は府城の各門を隊を分つて制壓し、國禎を執えようとしたのである。この事態を國禎とその家族は迂闊にも知らなかったと言う。分守道謝某は、軍の出動をも考えたが、事態の惡化を恐れ、大族の子弟を好言で以て慰撫した。「事態の責任を朱國禎について究明しよう」。騒然たる事態は、これで少しく収まった。』

學宮での會議（國交）で一度は均田均役が決定されたと考えられるが、最終的には、郷紳地主のまき返しと、さらには中央政府の意向で、改革は頓挫したらしい。ところで、時期からして最も近い方志である崇禎『烏程縣志』をはじめとして、多くの方志がこの事件について全く、或いは殆んど觸れず、明代の均田均役の内容についても全く記載していない。右の事態の考察は、已むを得ず朱國禎自身の記述について進めることにする。

(三)

朱國禎（字文寧、號平涵）は嘉靖三十七年南潯鎮に生まれた。學問は許孚遠を師としており、萬曆十七年、三十五才で進士に及第し翰林院に入って庶吉士となり、父の喪の明けた二十五年に檢討に昇ったが、二十九年には病を養つて家居中であつた。父守愚は、生員であつたが、嘉靖年間、徭役に苦しんだと言う。國禎は名義上二千二百畝の土地を持つ郷紳地主であつたが、改革を推進した契機の一つにこのような出自を考え得るかも知れぬ。

すでに見たように、二十九年の時點で、同縣（含歸安）の郷紳は改革に反對であつた。しかし、前章の海鹽縣の嘉靖末と萬曆初との相違は、第一に縣内外の郷紳に改革を推進・支持する動きが存在したことであり、第二に民衆の組織的な闘

いが存在したことであった。まず前者について見てみよう。葉向高『蒼霞草』卷一六「明工部都水司郎中二岑茅公墓誌銘」には、烏程の郷紳、茅國縉^⑧について

里居日有編審之議。公與宮諭公（國縉のこと）請畫田任賦、貧富適均。當路行其說、湖民大利。而議者亦紛起、以此市怨。

と述べており、國縉と事を共にした郷紳の存在が確認される。同じ湖州府では、すでに前節で紹介したように、長興縣の郷紳丁元薦が自らの縣で改革を推進するとともに、烏程の朱國縉を辯護していたらしい。管見の限り、湖州府の郷紳で二十九年の改革を推進したのは、この丁元薦・茅國縉の二人しか未だ見出せない。

府外では、右の葉向高が支持していたと考えられる。向高が國縉と親交のあったことは確かであるが、二十九年の改革について直接論じた記事は残されていない。しかし、少し遅れて三十年代半に南直隸で均田均役を行おうとした巡撫周孔教を慰める手紙を書いており、さらに同じく南直で改革を試みた徐氏式には、湖州之事の先例をよく考えて改革を行なうように奨め、また蘇州府の郷紳の反對に直面した民式を激勵もしている。東林の指導者であった無錫の高攀龍は、

年丈^⑨以地方役事、冒群譏衆訕、毅然爲小民造命。此大丈夫所爲。即此一事、他日立朝之概、可見。居廟堂之上則憂其民、處江湖之遠則憂其君、此士大夫實念也。居廟堂之上無事不爲吾君、處江湖之遠隨事必爲吾民、此士大夫實事也。

と全面的な支持と激勵を國縉に與えている。また嘉善の老郷紳丁寅は、國縉が均派里役之説を毅然として獨力にて主持したのを稱揚する手紙を送っており、他の均田均役の改革についても支持する文章を残している。王龍溪の弟子であった丁寅を除けば、朱國縉・葉向高・高攀龍・丁元薦と見て來る時、ここに東林乃至は天啓年間の反魏忠賢派を見出すことができるであろう。この系列の人物はすでに前章でも平湖の朱欽相、嘉興の蔣允儀、海鹽の攀維城などが現われているが、南直の諸改革についても同じような傾向を見るのである。壓倒的な郷紳の反對・妨害の中で、改革を推進したのはこれら一部の、いわゆる正義派官僚であった。

一方に郷紳の妨害があるが、それに抗して、均田均役を要求し、推進する。民、百姓が他方に存在する。前節に紹介した國禎自身による記事は、その階級的構成について全く傳えるところがないが、そこに現われた特徴からいくつかの推定が可能に思える。まず、平望―吳興の地に、きわめて組織的で集中されたデモンストレーションが展開されているが、この地域は、同時期について、目的意識的な抗租の存在が指摘された^③。かの「哲上」に他ならない。當時しばしば指摘され、かつ國禎その人も記述していた〈掲帖〉ように、きわめて零細な土しか所有せぬ農民^④佃戸が徭役を負担させられている現実があり、均田均役の實施は佃戸層の要求・利益たり得たであろう。この二點からして、一百二十里に涉つて首尾を見ざるほどに結集した群衆を構成する有力な部分に、佃戸を想定してもほぼ誤まりは無いであろう。

問題はかなり高度の組織的請願を實現した指導部である。當然のことに正義派郷紳朱國禎とは考えられない。國禎はこの事件によって罪を得ており、それはおそらくは群衆の示威・請願（の教唆・煽動）が口實とされたのであろう。しかし國禎自らが繰返し「意外」と語るが如く、郷紳たる國禎の一切關知せぬことであつた。この指導部は、按察使の來訪の豫定と日時を知り、廣い地域に涉つて民衆を組織的に動員し、かつ學宮で知縣と改革を論議し得る「百姓」である。そしてまた、デモンストレーションを展開しつつも、後段に到つて、郷紳の側の組織された暴力が動き始めた時、有效な防衛・反撃を組織し得ず、吳興の市街を「大族の子弟」の率いる反改革武裝集團の制壓下に放置し、つまりは實力闘争を貫徹できずに、一度は獲得したかに見える改革を挫折せしめてしまふ階層によって構成されていた。これらの諸點からあえて推論するならば、そこには佃戸層は想定し難く、下層讀書人・手作地主層の可能性が最も大きいのである。海鹽の事例に見たように、最も強く均田均役を希求し、具體的な要求を出していたのは、まさにこの階層であつた。

(四)

湖州の郷紳の怨みは深く、五・六年後、國禎（當時右諭德であつた）が休暇を終えて入京しようとした時に、北京では御

史彭端吾が湖州の郷紳に示唆されて、國禎を彈劾する事件が起った。國禎は自らの潔白を言い、徹底した查明を求める疏を呈して入京せずに歸郷する。爾來、度々の補任に應ぜず、天啓まで家居を續けた。三十九年の編審には、合郡公議が行われたとあるので、均田、郷紳全體が均田均役の實施については一應合意したと考えられるが、このことに當つては、知府陳幼學の果たした役割が大きかったというへ客問。この時國禎は往時に懲りて一語も發せず、知縣曾紹芳の咨問にも、ただ「宦戶貼銀一款」のみを駁しただけと言うへ均田。しかし、『朱文肅公集』の「自述行略」には長文の前文と四款からなる條議を以て知縣曾紹芳に答えたとしてその條議を載せており、同じ文が「答曾父母書」としても收録されている。條議四款は①定里②優免③註差④貼銀から成り、④は『小品』の「駁宦戶貼銀一款」と若干の異同はあるが同文である。前述「均田」の記述よりして④のみが批判の文章であるとすれば①②③は三十九年の改革を示すと考えられるが、それは①三百畝で一里長に充て、②一品—三千畝から吏員—十畝まで優免を限定し、③限外の田は派役するものであった。長文の前文では、優免は雜差のみで常役には及ばず、郷紳は一定の優免以外は役に當るべきことなどを極言しており、恨乃益深へ均田、予の罪を大家に得ることますます深し（自述行略）と自ら述べる狀況に結果した。

その後の推移の詳細は不明である。天啓二年の編審は知縣曾國禎によって實施されたが、朱國禎は助言と激勵を與えており（均田×曾有菴贈文）、曾國禎も努力して、人情に順ひ中略に従つて參酌をなし、たので、上も下も帖然たる改革が行われ、朱國禎も満足したと云う。嘉靖—萬曆半には民を抑えて改革を妨げ、二十九年には暴力で阻止した郷紳は、三十九年には怨みは含みつつも改革の公議に加わり、天啓二年には、帖然となったと云う。海鹽縣での推移と一致するのである。

四 結

本稿の目的は、均田均役の實施がどのような政治的社會的條件のもとで行われたか明らかにすることであつた。考察できたのは海鹽・烏程を中心とするごく一部の事例に過ぎないが、次のような過程を見ることができらるであらう。

均田均役は、下級讀書人をも含む、非身分制地主の強い要求と行動に基いて改革が實施された。郷紳は始め徹底して改革に反對するが、王學左派の郷紳、後には東林系などの正義派、官僚が郷紳の反對を押し切つて推進する例が見られ、天啓年間には實體・内心はともあれ、表面上は郷紳總體が改革を認めるようになる。その最終的な形態は康熙年間を俟たねばならないが、嘉靖—萬曆—天啓—康熙と見る時、郷紳の態度の變化が看取されるのである。

この變化は當時においても認識されていたが、その契機を直接に説明する史料はない。しかし嘉靖末年に海鹽の王學左派の王文祿が、上官が之が平を爲さざれば、下民は將に起ちて自ら之を平らかにし、以てその不平の憤りの言い難きを洩さんと警告し、變を將に形れんとするに消すものとしての改革を主張しており、萬曆半に烏程の民衆が實力で以て示威を行なったことにその一端が示されている。そして改革を推進したのが、鑛稅等について、恣意的な收奪が民の反亂を招き王朝の地主支配を崩壊させることを説いて來た正義派、官僚たちであつたことにもその一端が示されている。

烏程に典型的に見られたように、均田均役をめぐつて、一方に郷紳、他方に中小地主から佃戸までを含む民衆という對立が存在する。當該社會の基本的矛盾は抗租に表現されていたが、政治的局面では右のような構圖が現れていた。改革がいつさい拒絶される時、これは抗糧に轉化し得るであろう。清代中期以降の抗糧の歸趨が、その指導部の階級的特質の故に、支配者の側の改革による「收拾」と、會黨との結合による「革命」とに分化することを小島晉治氏が指摘しておられるが、明末清初の江南デルタで、抗租の盛行の一方で抗糧が殆ど記録されていないのは、かかる徭役（さらには水利、荒政など）の改革と、それによる中小地主と自作農層の王朝の地主支配へのとりこみがあつたからではないだろうか。改革は、何よりも「民」の怨念（王文祿の言う「不平の憤りの言ひ難きもの」と、顯在また潜在の暴力が生み出したものであつたが、それが公權力による改良の志向へと收斂される限り（按察使に大聲で訴えながら水に投じこむ民衆を見よ）、郷紳にとってはその想像力の範圍内にあり、包攝すべきものであつた。しかし民の怨念はつねにその方向を志すとは限らない。これと對極的に怨念のアモルフな流出に向う民衆に對して、丁元薦・樊維城・魏大中の如く、正義派官僚は假借なきかつ有能な抑

壓の實施あるいは支持者として現れるが、何よりもかかる非和解的な對立の顯在化を防ぎ、安定をつくり出すために、改革は推進されたのであった。改革が階級對立の尖鋭化に規定されつつ形成され、そして何よりも地主—佃戸間の基本矛盾が何ら止揚されていない以上、改革の作り出す安定は、階級間の緊張の消滅を意味せぬばかりか、むしろ緊張を安定の主要な屬性として内に含むものであった。かかる安定の突破は、改革の公權力への幻想が主體的にも客體的にも廢棄されることに一點は関わっていたのである。

〔付記〕史料収集に際して、人文科學研究所の小野和子先生の御援助を頂いた。付記して謝意を表する。〕

註

- ① 北村敬直氏「明末清初における地主について」歴史學研究一二〇號。一九四九年。
- ② 安野省三氏「明末清初、揚子江中流域の大土地所有に關する一考察」東洋學報四四—三。一九六一年。小山正明氏「中國社會の變容とその展開」『東洋史入門』西嶋定生氏編、有斐閣、一九六七年所收。同「明代の十段法について」『文化科學紀要（千葉大學文理學部）】一〇。一九六八年。濱島「明代江南の水利の一考察」東洋文化研究所紀要四七、一九六九年。同「明末浙江の嘉湖兩府における均田均役法」東洋文化研究所紀要五二、一九七〇年。川勝守氏「浙江嘉興府の嵌田問題」史學雜誌八二—四、一九七三年。
- ③ 小山正明氏「明代の十段法について」(一)仁井田陞博士追悼論文集」第一卷所收、一九六七年。(二)(元)文化科學紀要（千葉大學文理學部）一〇、一九六八年。
- ④ ③小山氏論文(一)三八三頁。補註②參照。
- ⑤ 濱島「東洋文化研究所紀要四七冊所載の論文參照。
- ⑥ 梁方仲「明代糧長制度」一九五五年。
- ⑦ 龐尙鵬「百可亭摘稿」卷一、奏議所收「均糧役以除民害疏、〈時浙江巡按〉」を見よ。
- ⑧ 濱島「東洋文化研究所紀要五二冊所載論文一四八頁所引「松江府志」卷一一の冒頭の記事。
- ⑨ 崇禎「松江府志」卷一二所收「萬曆庚戌撫臺徐（氏式）會題均役疏」。なお⑧一五三—四頁參照。
- ⑩ 鶴見尚弘氏「明代の畸零戸について」東洋學報四七—三。一九六四年。また「江蘇省明清碑刻資料選集」無錫三〇—「無錫縣均田碑」（萬曆三十九年五月）によると、均田均役施行前の無錫縣では、原額田土一百二十八萬九千餘畝のうち、「零星を以て免るる者十の四、官戸を以て免るる者十の二」であり、應役田は五十餘萬畝としている。なお、この原則が花分の根據となつた。

① 山根幸夫氏『明代徭役制度の展開』一二一頁。一九六六年。
 ② 萬曆『大明會典』卷二〇、賦役

嘉靖二十四年、議定優免則例。……如戶內丁糧不及數者、止免實在之數。……俱以本官自己丁糧、照數優免。但有分

門各戶、疎遠房族、不得一槩混免。

⑬ 同、隆慶元年の條

止免本圖戶下之田土、其餘各圖各鄉、不准優免。其詭寄田地等弊、仍許自首免罪。

⑭ 江南以外でも均田均役が實施されたことは、小畑龍雄氏「江北における里甲の再編」（山口大學文學會誌一六一、一九六五年）や小山正明氏「賦役制度の改革」（岩波講座世界歴史12所收）に述べられている。本稿では對象を江南に限定する。

⑮ 「明末浙江の嘉湖兩府における均田均役法」東洋文化研究所紀要五二冊所收。以下、前稿と呼ぶ。

⑯ a～dの内容については、前稿参照。

⑰ 管見の限り、桐鄉縣で均田均役の實施を示す記事は、明清を通じて存在しない。

⑱ 『丁清惠公集』卷八「復蔡培自父母」

⑲ 前稿一六七頁。なお史料の「大都以本圖田多爲主、客圖田少。即客圖之田、收并本戶。」の本圖・客圖を「所有地の最も多く集中している圖」と「それ以外の圖」とする筆者の理解に、川勝守氏から「居住する圖」と「それ以外の圖」であるとする批判がなされ（『張居正文量策の展開』、『史學雜誌八〇—三、三五頁』）、それに對する筆者の意見もすでに示しておいた（『史學雜誌八三—五、回顧と展望—七三年、明清—』）。

⑳ これをもとに筆者はかつて簡単な素描を試みた。「均田均役法實施の背景」岩波講座世界歴史月報12、一九七一年二月。

㉑ 『圖經』卷九「萬曆九年前任知縣蔡初行均甲事宜」の割註。

㉒ ⑲所引川勝守氏論文。

㉓ 本稿の所説の根本にも係わるので、再度補って引いておく。

按里長以人戶編簽、不取齊於田糧、自是祖宗定制……後來百姓規避役色、將田糧花分詭寄、向別圖巧自隱匿。又或因里有頑戶欠糧、荒田賠糧、及解軍等累、較量利害、轉展別竄去者。……於是丁糧多寡愈失其平、同一里長苦樂、天壤懸絕。有司縱費盡心力編役、役亦無繇得均。勢自不得不就田畝取齊、另編里甲。盡廢以戶僉編之舊、而後病可救矣。此是百姓自將前法蠹壞、非法元有弊復須更改也。（以下前稿に引く）但均田議、嘉靖間已有之。至萬曆九年、始克舉、則自有說。一則以照田編里、則田多里分須陞、田少里分須併。甚有都分亦須銷併者。成規頓改、難免非常之懼。未到勢窮理極時、有司尚未敢做。一則此時士夫優免尙無限制。但有田地借蔭在戶下、並不充役。若行均甲、勢必先將免額刪定、然後可將餘田派配、令無縮虧。人即不爲阻撓、我自嫌其刻薄。有此種種難調之情事、亦未易即舉。一則以自國初到今、各里田糧偷漏漸多、坐丁虛額、向係本里包納。今若均田將里分銷併、此糧屬之何人。取報陞者神補、既數不相當。就舉縣田攤賠、又情未通。允必待丈量清楚、割盡虛糧、然後均齊畫一之政可行。（以上前稿所引）此均里美政、直待二百餘年積弊之後、合縣士夫帖然無議之日、又適奉明例通丈田土、機會種種湊合、可以有爲。前令蔡公方能成

就、此大功德於鹽民也。(傍點は前稿では誤植)

②④ 侯太府とは嘉靖三八年(一四一一年)に在任した侯東策である。從つて文中の「大造」は嘉靖四十年辛丑のものである。

②⑤ 嘉靖三五年から四四年まで在任した同知范鵬であらう。

下級讀書人・生員が徭役の負擔に苦しむ例は多い。顧憲成の師であつた薛應旂『方山先生文集』は嘉靖年間常州の事例を多く傳える。武進のもと生員劉大中(弘治一七→嘉靖四五)は役負擔に疲れて發病して死に(三〇)劉懷耕墓誌銘、無錫の人強頰(弘治二→嘉靖四二)は科第を目して學問したが、析産と賦役繁重のために家事漸く傾き、課業を放棄、二子に望みを托したが長は父の勞を見て學を棄て、次が生員となつた(三一)強處士墓誌銘・應旂の族人、勤(成化二一→嘉靖四五)は師を延きて子を教育し生員としているが、かねてから役に服し、晩年には、徭役の重くして身累となるを見て、毎に置産を以て戒と爲した(三一)思蘭薛翁墓誌銘)等多くの例が挙げられている。

なお薛應旂は嘉靖年間、浙江提學副使たりし時に公移を發し生員は例に照らして優免し、單丁(の生員)を重差賦役につかせて朝廷の作養の意に背かしめることのないようにするとともに、規定以上の優免は拒むは無論、官の側でも生員の免役を求める聲には一切耳をかさぬことを命じている(卷四七行各屬教條)。嘉興府の例でも、魏大中の父、邦直(嘉靖一六→萬曆二〇)はその父に代つて里役に服し、もともと富裕でなかつた家計はたちまち傾き、邦直は大中の出生を機に蒙師となつて生計を立て、大中を科第させる決意をした(魏大中『藏密齋集』卷一自譜。卷一三先考繼川府君行實)。蘇州府の常熟では、鄉紳

趙用賢(嘉靖一四→萬曆一六)が一九歳にして生員たりし時の縣學におけるエピソードに、生員が糧長に充當されることが示されている(趙士春『保間堂集』卷二四に記述されている文毅公||趙用賢の逸話)。松江府華亭縣の唐之屏は隆慶元年に生員となつてより度々鄉試に落第していたが、百畝の産無きにもかかわらず、里中の人から役を押しつけられ、知縣に抗辯したが容れられず喧嘩別れとなり、書齋の壁に「萬曆二十二年糧長唐某」と大書して自ら策勵し、後に舉人・進士と昇つて郡邑の大夫をして、赭色無きこと能はざらしめ、た(天啓『雲間志略』卷二三唐常山魯城公傳。おそらく、里中の人)とは、郡邑の大夫||鄉紳であらう。なお同書同卷の「陸考功中陽公傳」には南直隸巡撫徐氏式の萬曆三十九年の均田均役に批判的な見解が示されており、編者何三畏は士紳を役することに反感を持つかに見える)。

②⑦ 萬曆『秀水縣志』卷四官師(民國一四年排印本)

由禮門、字中夫、杞縣人。進士。隆慶二年知縣事。……時有議均里甲、概及士夫者。公曰、仕・民有等。爾民子孫、豈無登仕者。(優士於今、正以貽恩于爾民之後、)此不均之均也。及編審畢、民帖然稱平役。陸兵部主政。

(一)の部分、康熙の『嘉興府志』と『秀水縣志』にあるものを補つた。これは由禮門が理不盡な論理で以て、民を抑壓したと把えることもできるであらうが、むしろ、この均役を求めた民、がその子孫に登科の可能性を持つ階層、つまり②⑦で觸れたように、生員層と重なりあう階層に属していることを、この史料は推定させる。なお康熙の府志・縣志ともに名宦の項では田

禮門としているが、乾隆「杞縣志」によると由禮門が正しい（照合に田中正俊氏の手を煩わした）。

②⑧ 浙江巡撫龐尙鵬は糧長の改革に際して、「權豪を恐れず、賄賂を受けず」に實施するならば、「賢能を以て特薦すること」を言っている（『百可亭摘稿』卷一奏疏所收「均糧役以除民害疏」）のもこれを裏付けるものである。

②⑨ 鄧楚望か。嘉靖三十八年進士。行人を経て、禮科給事中となり、浙江副使に進んだが、隆慶元年高淳縣丞に左遷されている（明人傳記資料索引による）。

③① 當蔡侯審冊時、王（文祿）引見此三人、具陳均甲之便與不均之不便。侯立決、懸議於通衢、矢在必行。

郷紳との合議からではなく、民の意見を採ることから始まっていることに注目したい。

③② アジア歴史事典第八卷に倉田淳之助氏の紹介がある。

『嘉禾徵獻錄』卷三七王文祿の條（『橋李遺書』第二集所收）字世廉、號沂陽。……性倜儻、精騎射擊劍（もともと海寧衛の武官の家系である―筆者註）……文祿少爲諸生、有文名、中嘉靖辛卯鄉試。居身廉峻、戶田三百、請編役如平民。令有不廉者、因公車之餞、文祿拔劍起舞、腰向之曰、此劍能斬貪汗。年八十餘、猶就試京師、與秀水呂科、稱爲二老。然本業久荒。萬曆丙戌首題、文祿以諧語作結。主考內閣王錫爵、舊與文祿定布衣交。索卷讀之、以爲笑談。……卒無子。……

③③ 「答范二府書」

昔受學于陽明老先生高弟王龍溪先生、又得請質于董兩湖先

生。

なおこの文言は、同知范の書簡の「良知」云云から導き出されている。董兩湖とは誰のことか不明。但し海寧には高名な陽明學派の董澤一穀父子が居た。（『明儒學案』卷一四）

③④ 「策樞」均役

不畏勢豪巨宦、清查詭寄子戶、按田而定之。京宦・舉人・監生・生員・吏承等、依例優免外、餘則爲役。免之者優之也。冀其出身、以報國也。

「上侯太府書」

劄黃冊、止言男一丁・草房一間・田若干畝、未見有某鄉宦・某進士・某舉人也。由此觀之、同一齊民也。無優免之例也。試取冊而驗之可也。京官優免者爲勞于職也。免本戶的名、非免詭寄也。外任休致無之也。今也槩免之。不特免己而免人親戚有利者、皆得免之、何多也。貧民曷堪乎。

③⑤ 「上臺府時務書」

萬民之中、惟士爲榮、惟農爲苦。士以希賢爲志、農以力田爲生。爲士者未必俱賢、一登甲科、盡取給于農。而農竭力以耕耘之、炎蒸揮汗、烈日爍肌、扒掘苗根、僂僂膝步三時暑雨之忙。以幸收穫之畢、多值凶歉、而徵輸必盈、爲仕者之供、而仕者不但安受而已。……士與農齊民也。民吾同胞兄弟之義也。譬諸父母生二子焉。一子聰明而出仕、乃曰享其逸樂、一子愚昧而務農、身集于勤勞、已不堪矣。……豈兄弟之義乎。

「上侯太府書」

國恩而不知報之則非良臣、民望而不知答之則非志士。……

聖祖設學校以育才、制科第以登賢、欲官之以安民保國也。

故始錄于泮、卽復其身、一鄉皆喜曰、某爲生儒矣。旣而拔之科、一鄉皆喜曰、某爲舉人矣。旣而賜之策、一鄉皆喜曰、某爲進士矣。屢進而爲大臣、一鄉皆喜曰、某爲極品官矣、鄉邦之光也。夫國恩大矣、民望切矣。原始要終、凡百供給、廩錄・水手・牌坊・賀餞之費、雖國之常典、實民之膏脂。不思所以報答之、可乎。

なおかかる士大夫批判に從來の糧長層に代つて、郷紳層が、江南の社會の支配層として登場する轉換期の一端を見ることができるところか。

③⑥ 「上臺府時務書」(③⑤所引に續けて)

(豈兄弟之義乎)。爲父母者心恐未安。天地人之大父母也。天視民視、天聽民聽。民怨已極、天心至公、必將假手、有不可言者。

「上侯太府書」

夫均甲者、均民心之不均也。所以均鄉官之怨、而及子孫受福之均也。……均役以久鄉官之富、均怨以久鄉官之壽、實爲鄉官造福也。何也。貧民代鄉官之役、日祝鄉官之死、怨極感天、必促其壽。鄉官一死、百役推與之、以速鄉官子孫之貧。亦天道往復之理也。敝鄉有張正郎者、田止三百餘畝。死後賣盡、而役不休、二子逃亡矣。可一徵矣。

③⑦ 云うまでもなく、この四點の構成は、筆者が抽出したものであり、王文祿の文章そのものがかかる構成を取るものではない。また分量から見て第二點に最も多くの部分が當てられており、第一點も、第三點の二も第二點に關わるようになってい

る。なおこれらを一貫する論理が、「上范二府書」に、心と性」を論じた部分に示されているかも知れぬが、その分析は今後の課題とする。

③⑧ 結論的になぜこの状況の下で改革が爲し遂げられたか、決定的な契機の解明はまだ充分でない。なお蔡逢時はこの後禮部員外郎に拔擢されており(『明人傳記資料索引』八二二頁。『圖經』には海鹽在職間の事蹟しか載っていない)、昇つても多くは六部の主事に進むのに比べて異例の昇進をしている。おそらくは張居正による丈量實施なども關連しつつ、海鹽一縣内にとどまらぬ政治的條件も背景に存在するのではないか。

③⑨ 彭宗孟、字は孟公。萬曆二十九年の進士。官は湖北按察使に至つた。長子長宜はこの時舉人(崇禎進士)、五子期生は進士となつており、一時家門の鼎盛を稱された大郷紳である(乾隆『海鹽縣續圖經』卷六人物篇、前明の彭宗孟・彭長宜・彭期生の條)。

④① 胡慶亨、字孝嶺、號赤城。……中萬曆丁酉浙榜、……天啓初年公告病家居。邑令樊公知其博瞻、託之脩志……(乾隆『續圖經』卷六人物篇、前明)

④② 『明史藝』卷二百十六、樊維城傳

④③ 田中正俊氏「民變・抗租奴變」(『世界の歴史』ゆらぐ中華帝國「所收」五四頁。また小野和子氏「明末・清初における知識人の政治行動」(同書所收)九〇頁。

④④ 『海南史學』12掲載豫定の拙稿「明末江南の葉闔生の亂について」参照。

朱國禎「湧幢小品」卷一四先兆、崇禎『嘉興縣志』卷一三徐必達の條などに見える。徐必達の意見は崇禎の縣志やその文集

『南州草』に多く収められているのに對し、賀燦然のそれは未だ見出し得ない。その文集『六欲軒初稿』は、萬曆二十二年舉人（翌年進士）となっている彼の生員のころの文を收録したもの（同書自叙による）であり、萬曆二十九年と推定されるこの論争については觸れるところがない。

④5 『湧幢小品』卷一四均田。丁長公とは元薦のことである。丁元薦については『明史藝』一一四に傳がある。東林と浙黨から目されていた。その著『西山日記』上、日課に次のように述べ、郷紳が徭役を忌避する傾向を批判している。

吳興諸大家・縉紳、強半起于糧長。其子孫至今繁盛。吾邑如吾族、如朱、如孫、如李、皆當糧長起家。昔之富翁、挺身于戶役中、千磨百鍊、出來成一家。今之富翁、皆巧爲規避躲閃。體面氣魄、較前十不及一。五十年前、尙有財主、如吳十萬・臧恭三、皆以布衣、代長興獨發一年兌糧。今士大夫中、有其人乎。：先大夫嘗言、大家巨室一方元氣、元氣各處蕭索、國運從之矣。

④6 同治『長興縣志』卷三三雜識・紀事所引、莫理齊「記盜殺石侯事」康熙『縣志』卷六游士任の條

乃若均田一事、區區贏縮、官民多寡、較若割。胥吏不得貪緣爲奸、垂久遠之利。

④8 康熙『德清縣志』卷七治行傳、能德陽の條。また同書卷八藝文志、金明時「熊邑侯去思碑記」。

④9 前稿一八〇〜一頁参照。なおこの間の事情を詳しく傳えるのは朱國禎自身の『湧幢小品』卷一四の諸篇しかない。本文、注ともに、以下にへで示したのはその篇名である。

⑤0 〈掲帖〉に「試度、五十年來能保閭里間、圖圖甲甲、盡如其舊哉」と批判しているから、おそらく里甲の不均衡をそのままに、在來の里甲を融通せずに機能させようとするものであらう。前節の長興縣の「走區走甲」と對比を爲すと考えられる。

⑤1 會典の規定は本戶の名のみの優免を定めていたが、近親者を含めるのは當然のこととなっていたようである。朱國禎自身次のように云う。

目下某之田、自祖遺續置、母弟寡妹兒婦宦產、并縣主批准小墾沈潜七伯餘畝之數、共二千二百三零、除優免外、該充四名。顯註二差。（『朱文肅公集』條議四款の四、「貼銀の項」）。また後に二十一年の「董氏の變」では「青年客氣の正義感」を持ち「かなりの自己反省」をしたとされる董嗣成（佐伯有一氏「明末の董氏の變」東洋史研究第一六卷第一號）においても次のように「寒族」を含めた優免を求めている（なおこの里甲は明らかに屬人的なものである）。

屢以瑣事干瀆、致煩清慮多矣。無任愧感。茲又有不得不陳者。家下有里遞四名。六甲・十甲係家下的產。而七甲則舍妹夫申經峪之產、九甲則寒族之產。……今當編審解戶之時、敢求臺下、俯念大臣之體、得賜寬免。……（『董禮部集尺牘』下、與徐邑侯）

⑤2 同一の字句が、『圖經』に見える。②参照。

⑤3 〈均田〉……此議發之已久。餘有所感、揭之撫按、誤採發下。時既編審已定、衆當憤結時、闕然並起。適按臺馬起莘從聘、自嘉興將至。衆往迎、大刻均田便民四字、粘於道傍、處々皆遍。因隨按臺舟、自平望至郡城、一百二十里布滿、極目不見首尾。

愈近愈多。號呼投水者、往往而是。既至、登輿。衆擁積不得行。擄數人、旋釋之。抵署問狀、兩縣主又失辭。按臺怒、却立曰、民情如此、三日不靖、於汝乎取之。於是大議泮宮、擠排幾至墮橋。權在百姓、不在縣主矣。縣主亦怒、據均字以一切法齊之。而各大族之子弟互糾集、直犯府主、加惡聲。府主震怒、多潛遁去。有二生犢甚、自以名實之、以示無遂逮捕不可解。而初發時、率其僕從可千人、抵潯焚餘居。未至三里、或云、小民聚且格鬪、乃返。余妻子皆懵不知。又分布郡城各門、欲執餘。余亦懵不知。而守道謝某至欲請兵、虞變、好言慰諸子弟曰、可速問之朱平涵。凡洵々者旬日、乃小止。……

⑤4 あいまいな用語であるが、しばらく使う。

⑤5 方志によれば、時に在任したのは知府が陳亮采、烏程知縣が何節、歸安知縣が吳殿邦である。なお乾隆の『湖州府志』卷二七郡守、卷二八州縣は各守令の次の補職を記すが、萬曆年間の知府一五名のうち、卒官・艱去五名を除けば九名が陞任（ほとんど按察副使へ）しているのに對して陳亮采だけ「降山東運同」とある。また烏程では十一名のうち、(一)主事に陞進五名、(二)調縣二名、(三)罷任（大計去・遣戍）二名、(四)不明二名、歸安十一名では(一)六名（御史を含む）(二)二名、(四)二名、卒官二名となっているが、何節・吳殿邦ともに(三)に含まれている。

⑤6 黃宗羲『明夷待訪錄』五學校の思想は、一定の現實に根ざしてはいなかったか。

⑤7 『勢家の佃戸叢僕』へ掲帖「僕、盡く幸いに免ず（へ緒帖）」と國禎が述べたように、優免を求める詭客が、奴僕身分への投靠と重なっており、均田均役の實施は彼等自身の利害に係わって

いた。なお傅衣凌氏「明清之際的奴變利佃農解放運動」（『明清農村社會經濟』所收）参照

⑤8 不明。乾隆『湖州府志』卷二六には「浙江布政使司左參政分守浙西」の姓名を載せるが、萬曆年間に謝姓の人物は記載されていない。

⑤9 〈均田〉（⑤3に續けて）

既議上矣。撫・按會題、戶部駁下。按臺怒、勒所司毋動。

⑥0 この他に『朱文肅公集』自述行略にも記述がある。なお『南林叢刊』所收『潯溪紀事詩』下には「湖錄」を引用し、「諸巨室の廣く阡陌を有する者は便ならざるなり。遂に切齒して大いに譁ふ」と述べており、騷擾があったことを傳える。

⑥1 『朱文肅公集』自述行略

⑥2 「〃」心齊府君行實。また咸豐『南潯鎮志』卷一二人物一、朱守愚の條所引、許亨遠「心齊朱公墓誌」。なお傅衣凌氏も、

國禎の出自と政治行動の關連を説いている（『明代江南市民經濟試探』一一〇頁）。

⑥3 ⑤5参照。萬曆三十九年である。

⑥4 『松郡婁縣均役要略』の王廣心の序に

故明萬曆中若上朱平涵先生首創均役條議……一時士大夫從者什一、違者什九。……

と言う。

⑥5 歸安の茅氏については、佐伯有一氏「明末の董氏の變」東洋史研究第一六卷第一號に紹介がある。國禎は坤の仲子である。

⑥6 なお葉向高はこの文で、國禎が諸悍僕を戒飭し、ために郡中諸大姓が人に虧斂された時（董氏の變か）、獨り恙無かったこと

を稱揚している。他に咸豐『南潯鎮志』卷二四志餘二所引、潯溪紀事詩註に、國縉の子元儀の文を引き、同じく、國縉が改革を推進した事實を伝える。

- ⑥⑦ ④⑤参照。なお共通の師である許孚遠は二十九年の件に關して國縉を怒ったが、その誤解を解くべく、丁元薦は努めたと云う（均田）。孚遠は國縉が民衆を煽動したと誤解したのであろうか。

- ⑥⑧ 『蒼霞續草』卷一七答周懷魯。なお周孔教も東林と目されている。

- ⑥⑨ 『々』卷一九答徐檢吾（二通あり）。なお南直の改革は紙數の都合で觸れ得なかつた。別稿を豫定している。

- ⑦⑩ 高攀龍は萬曆十七年の進士、國縉と同年である。

- ⑦⑪ 『高子遺書』卷八上答朱平涵

- ⑦⑫ 『丁清惠公集』卷七與朱平涵少司成

- ⑦⑬ 二九年嘉善の謝應祥（卷七「與謝鳳章父母」）、三九年の徐民式（卷八「復徐簡應撫」）、三〇年代半の周孔教（卷八「與周懷魯應撫」）。なお丁賓は王畿に學んでおり陽明學左派の系列と考えられる（卷七「與耿淑臺操院」）。

- ⑦⑭ 『明史稿』列傳卷一百二十五、侯震陽傳附朱欽相傳、同卷一百三十六、蔣允儀傳參照。

- ⑦⑮ 詳細は別稿に譲るが、南直巡撫周孔教（國縉「自述行略」萬曆戊申の條に孔教との交流を語る）、常州知府の歐陽東鳳、常熟知縣の楊漣など、均田均役の數少い實施者に東林を見出すことができる。なお均田均役と本質的に同じ内容の水利改革を實施した常熟知縣耿飭も東林である（『明儒學案』卷六〇。拙稿

「明代江南の水利の一考察」東洋文化研究所紀要四七參照）。

- ⑦⑯ 萬曆『秀水縣志』卷一輿地

- ⑦⑰ 前稿一五〇頁參照。

- ⑦⑱ ③の末尾。また（均田）では天啓二年、知縣曾國禎の間に對して「罪魁なり。何をか敢へて言はんや」と答えており、（先兆）にも自らが罪を得たと記している。

- ⑦⑲ （均田）の冒頭を見よ。また（條議自序）にも

實不意遂見施行、又不意萬衆從而鼓湧。

と、提議の採用ならびに民衆の行動を意外としている。

- ⑧① 「自述行略」。なお右諭德に昇進したのは三四年である。

- ⑧② 『朱文肅公集』疏揭「右諭德假滿進京、被劾辭官疏」掲。

- ⑧③ 號は鈞塘。奴僕や、土猪、奸民、の彈壓にも凄腕を振っている（康熙『湖州府志』卷一六名宦）

- ⑧④ この年、春坊左庶子に昇っている（「行略」）が、おそらく出仕していないであろう（『明史稿』卷一百十九、朱國禎傳）

- ⑧⑤ 他に「市戸」への科派（田土所有に係わりなく里長を割當てる）が論ぜられ、この點は嘉興府でも問題となっており、徐必達と賀燦然の論争はこの點にも關わっていたようである。商業・高利貸資本の利潤に對する國家權力の關わりを示すものであるが、今後の検討に残したい。

- ⑧⑥ 曾國禎はこのうち天啓七年には魏忠賢の生祠を蘆溝橋に建てる官僚として現れる（『明史稿』二二五、閻鳴泰傳）。天啓二年には、均田均役が、正義派だけでなく、鄉紳全體の容認せざるを得ないものとなっていたことの一端が示される。なお時の首輔は葉向高、國禎も翌年内閣に入る。

⑧7 傳衣凌氏の用語による。⑧所引論文七九頁。

⑧8 清初の改革は別に検討するが、すでに次の二論文があり、特に藤岡次郎氏のそれは政治的過程にも觸れるところがある。

龍宮谷英雄氏「近世中國における賦役改革」歴史評論一一・三、一九四六年。藤岡次郎氏「清代の徭役」歴史教育二一九、一九六四年。

⑧9 改革の必要性の認識が郷紳において異なるかに見える荒政と均田均役を同一に把えきれぬ面があるかも知れぬが、この變化は森正夫氏が荒政について指摘した過程と符合するように考えられる。森正夫氏「一六一一八世紀における荒政と地主佃戸關係」東洋史研究第二七卷第四號參照。

⑨0 二一四。『圖經』における胡震享の記述。

⑨1 この對立そのものも、中小地主の背景に佃戸の突き上げを考

えるとき、抗租と無縁ではないと考えられる。拙稿「明末清初、江南デルタの水利慣行の再編について」湖州府を中心に「社會經濟史學四〇—二參照。

⑨2 「太平天國革命」『世界歴史』二二所收、二八八頁。抗糧の原因に往々にして紳・民の別が問題となっていることも興味深い。

⑨3 萬曆二十九年の群衆の示威に關する朱國禎の記述が、反感を全く示していないことに注目すべきである。

⑨4 たとえば東林とされる常熟知縣耿橘の一七世紀初の水利改革では、地主が負擔分を佃戸に拂わぬ時、納入すべき佃租から佃戸はその負擔分を、加倍算除、することを認めている。⑨所引拙稿、三七—三九頁參照。

別都 or *ta-du* 他都 apart from the *du* 都 where the original registration was) was called *yi-zhuang* 寄莊, and the households involved appeared on the census registers as *yi-zhuang hu* 寄莊戶; apart from paying the tax grain on their lands, they were assessed for labor services (*yao-yi* 徭役, *za-yi* 雜役). An important point is that as *ji-ling hu* 畸零戶 the *yi-zhuang hu* were not considered as regular constituents of the *li-jia* 里甲 system, and were relegated to the periphery of the system. After the middle period of the Ming, *yi-zhuang* became a device for evading taxes and service obligations, and with the expansion of exemptions for the local gentry, there came to be many gentry and official households among the *yi-zhuang hu*. The taxation and corvée reforms in late Ming Jiang-nan 江南, the *shi-tuan fa* 十段法 and the *jun-tian jun-yi fa* 均田均役法, were basically responses to the development of gentry landownership and attempts to deal with the exemptions and special privileges of these local gentry, and the curtailment of exemptions for *yi-zhuang hu* was the cutting edge of the reform attempts. What made this possible was chiefly -- though the regional chauvinism of the local gentry was also important -- the intensification of the tenants' (*dian-hu* 佃戶) rent-resistance struggle during this period, which caused the gentry, their authority as landlords being menaced from below, to avoid being driven into a collision with the power of the state.

On the Operation of *Jun-tian jun-yi fa* 均田均役

Atsutoshi Hamashima

The *jun-tian jun-yi fa* 均田均役法 went into effect in the prefectures of Jia-xing 嘉興 and Fu-zhou 福州 in the late Ming period as a reform of the *li-jia zheng-yi* 里甲正役 system. The imposition of *zheng-yi* was based on acreage, and the privilege of exemption from labor service (*you-mian* 優免) accorded to the gentry was reduced. On

account of the latter provision the gentry objected to the enforcement of the law and obstructed it in many ways, sometimes by violence.

On the other hand, those who welcomed the enforcement of the reform most warmly were small landowners who had no such privileges, including the class of *sheng-yuan* 生員. Many of the reforms stemmed from proposals made by this class. At times they mobilized large numbers of people in demonstrations. These movements on the part of the class of small landowners are associated with the intensification of class confrontation, the existence of which in this period has already been pointed out.

In the face of this crisis of authority on the part of the gentry and the imperial state, "righteous" gentry, led by the Dong-lin clique 東林黨 and others, attempted to liquidate the crisis by co-opting small landowners into the establishment on the basis of certain concessions. One can observe such a political manoeuvre in the enforcement of *jun-tian jun-yi*.

Early Qing 清 Land Surveys

Genshō Nishimura

The Qing government ordered a cadastral survey of the empire to be carried out during the Shun-zhi 順治 period, aiming at comprehensive control of the land registers, but in the face of financial difficulties there was no alternative to settling for a survey which was designed only to correct the tax registers and increase taxes. The reason for the difficulties of tax collection was tax evasion (*kang liang* 抗糧) on the part of local gentry, landlords, and clerical functionaries, which had become a routine thing.

The third nationwide land survey, ordered in 1663, was an indication of the deep contradictions between the state and the local gentry centering on tax collection. The state attempted to seize control of the